

第4回 療法学の基礎知識

はじめに

現在、医療や医療以外の分野でも療法、セラピーなどの言葉をよく見かけます。動物が介在する場合にも、動物介在療法、乗馬療法、アニマルセラピー、ホースセラピーなどよく耳にする言葉でもあります。しかしこれらの言葉の意味が曖昧であったり、使う側が十分に理解していないまま使われていることも多々あると思われます。

療法学について語る前に、療法とはどのような事を意味するのかを少し整理する必要があります。

検索すると「療法」とは、種々あるようですが、まとめると「治療のしかた。治療の方法」を意味する言葉となります。では「治療」とは、「病気や怪我いわゆる傷病をなおすこと。病気を治癒させたり、症状を軽快にさせるための行為」となります。

「セラピー」は「現代医学で行う新しい治療法・治療。特に手術や投薬を伴わない、心理療法、物理療法」とのことです。本来セラピーは治療ですが、日本では「セラピーは治療ではない」ととらえている人もいます。

犬を活用した医療活動として、ファシリテッドッグといった言い方も存在します。その分野では、セラピードッグの役割を“動物介在活動”とし、ファシリテッドッグの役割は“動物介在療法”，つまり単に癒すだけでなく、医療行為にかかわる部分にまで踏み込んで活動を行うこととしています（山賀 2016）。

作業療法は、「身体または精神に障害のある者、またはそれが予測される者に対してその主体的な活動の獲得をはかるため、諸機能の回復・維持および開発を促す作業活動を用いて治療・指導・援助を行うこと」と定義されています。障害の治療・指導・援助も療法・治療には含まれていることとなります。

このように、「療法」や「セラピー」という言葉の使われ方が曖昧であることを踏まえて、ここでは「療法」とは、「治療のしかた、治療の方法」とし、対象となる人が日常生活上抱えている問題を解決する方法として述べたいと思います。

I. 療法・治療の流れ

種々の傷病や障害が原因で日常生活に支障をきたす症状がある場合に、療法や治療がおこなわれます。療法や治療は非常に多くのものがありますが、一般的な

療法、治療の流れは以下のようになります。

問診：

療法、治療を受ける際にどのような機関に行っても初めに行われることです。現在どのような症状なのかを直接本人や家族から聴取し、どのような問題があり、その原因がどこにあるのかを予測し、原因を明らかにするためどのような観察や検査を行うのかを計画します。

観察・検査：

問診により得た情報から、その症状の原因を探るために観察や検査を行います。その結果から症状の原因を明らかにするための情報を得ます。

問題点の把握：

問診や種々の検査結果から、現在の症状の原因を明らかにし、それを問題点としてとらえます。

目標の設定：

日常生活に支障をきたしている症状が改善されて、最終的にはその対象者が日常生活を送ることが可能になることを目標にします。

具体的な療法の立案：

問題点を解決し、目標を達成するために具体的にどのような方法で療法、治療を行うのかを立案します。そのために重要なことは、選択した療法、治療の効果を十分に把握していることです。投薬による治療であれば、どのような薬が存在するのかを知識として持っていること、さらにその薬の効果を把握している必要があります。

療法、治療の実施：

立案した療法、治療を実施します。

効果判定：

療法、治療を行った結果、目標を達成することができたのか、できなかったのかを判断します。目標が達成されれば療法・治療は終了となりますし、目標が達成されなければ、療法、治療を変更して実施し、再度効果の判定を行います。

以上が大まかな療法、治療の流れとなります。特に重要なことは、現在の症状の原因を予測し、その予測に基づいて検査を行い、最終的に原因がどこにあるのかを明らかにすることです。この部分は実施者が持っている知識技術の範囲でしか対応ができないので、実施者がどの程度の知識技術を持っているのかに大きく影響されることとなります。

American hippotherapy association（アメリカ乗馬療法協会）の主催する講習会では、乗馬療法を実施するために事前に行われる評価の流れを以下のように例を挙げて説明しています。（American Hippotherapy

Association 2006)

乗馬療法の目的を日常生活上の困難さを解決することとし、「日常生活上の役割遂行が困難である」としています。その例として、「食料雑貨店へ買い物に行くことができない。具体的には、歩行して移動することや、商品を取り上げることが困難」これを能力障害としてとらえています。

能力障害の具体的な状況として、機能的な制限を把握することが次に必要となります。

「手を差し出したり、拳上するような上肢の活動時に立位バランスが確保できない。3メートル程度の歩行後にはその疲労に耐えなければならない」これを機能的な制限としてとらえています。機能的な制限の原因となっている機能障害を把握することで具体的なプログラムの立案が可能となります。

「1, バランス反応遅延, 2, 不十分な骨盤の可動性, 3, 股関節内転筋緊張亢進, 4, 歩行時に過度の労力を必要とする」これらを検査結果（機能障害）としてとらえることで、療法、治療として効果的な活動を選択しプログラムの立案が可能となります。

療法・治療としてのプログラム例は以下の通りです。

1, バランス反応遅延に対して、騎乗時の馬の三次元の動きにより立ち直り反応、平衡反応を促す。2, 不十分な骨盤の可動性に対して、馬の動きにより、骨盤の前後傾、左右の傾きを促す。3, 股関節内転筋緊張亢進に対して、馬に跨ることで股関節の内転筋をストレッチし、さらに馬の常歩の振動により筋緊張を抑制する。4, 歩行時に過度の労力を必要とするものについては、馬上の運動により心肺機能の向上へつなげる。

以上のように対象者の詳しい状況の把握とその原因を明らかにし、療法、治療も具体的に計画して行くことが重要と言えます。

II. 動物介在療法, アニマルセラピー

動物介在療法, アニマルセラピーとは動物を介在させて療法, 治療を行うことと理解できます。何らかの傷病もしくは障害により日常生活に支障をきたしているときに、その問題を解決することにより、その人らしく日常生活を行うことができるようになることを目標にするといえるでしょう。

療法, 治療を行う際に重要なことは、対象者の傷病や障害の状況を十分に把握することは前述した一般的な療法・治療の流れと同じです。大きく異なる点は、療法・治療の具体的な方法に動物を介在させる点です。医師が薬の効果, 手術による効果を把握していることで投薬, 手術を行うことができるのと同様に、動

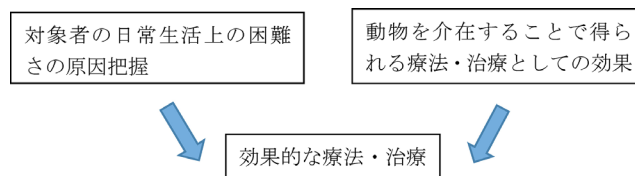


図1 効果的な療法・治療

物介在療法やアニマルセラピーを行うセラピストが動物を介在することで効果を把握していることで、療法, 治療を行うことができます。

種々の動物を介在させて行うことがあると思われませんが、療法, 治療では動物の違い, 動物とのかかわり方の違い, などによって得られる効果の違いを把握しておく必要があります。その両者を十分に把握したうえで、療法, 治療を行うことで効果を得ることができます。(図1)

日本における動物介在療法は欧米諸国と比較するとまだ発展途上にあるといえます。その理由は科学的な検証が不十分であることによるといわれています。療法・治療としての科学的な検証を行うためには、対象者の傷病, 障害の理解と把握が十分に行われる必要があります。例えば発達障害に分類される注意欠陥多動性障害児は多動性障害と注意障害に分類でき、さらに多動性は前庭覚機能や固有受容覚機能などの感覚機能の問題としてとらえられる場合があります。前庭覚機能の問題なのか固有受容覚機能の問題なのかを明らかにすることでアプローチすべき問題が明らかになります。これはあくまでも一例です。

加えて療法, 治療の方法の違いによる効果の違いが十分に理解されていることが重要です。

まとめ

「療法学」と単独で用いられることはなく、動物介在療法などのように「療法学」の前にその方法を表現する言葉がつけられることがほとんどです。また、療法は原則として医療に分類される言葉です。一般論としての効果ではなく、あくまでも個々の問題点に対応するための方法であることを理解しておくことが重要と言えます。

文献

American Hippotherapy Association Inc.: Hippotherapy Treatment Principles -Level1-Workshop Manual, 2006
山賀沙耶. 犬を活用した医療活動, “動物介在療法”とは?. 2016 <https://www.docdog.jp/2016/07/magazine-facility-dog-01.html> (最終閲覧日平成29年3月26日)

石井孝弘(帝京科学大学)